

# 宇治茶の歴史

佐藤 良士



左  
海  
華

**古代の茶** 茶の木は、椿科の常緑灌木で、温暖多雨の気候を好む。原産地は中国の雲南省、四川省の山岳部。中国の漢の時代には、飲用の薬草として栽培されていた。

『茶を人生の用に立てるとなれば、飲むに最も相応しいのは、行いの正しく、徳の身に具わった人であろう。或は又身体がほてり、喉が渴き、頭脳痛み、目が霞み、手足だるく、

身内の節々がのびやかでないというような時に、四杯五杯と重ねて飲むのは、正に甘露にも醍醐味にも拮抗して、一步だも譲ることではない』

これは、唐代の茶の栽培法や喫茶法が著された「茶経(ちゃきょう)」（760年前後）にある文。唐の人々は今の私たちと同じように、「茶を人生の用に」役立てて、行いを正しくし、徳を身に具えたのである。

飛鳥・奈良時代には渡来人や遣唐使によって日本にも中国の茶が入ってきていた。

729年に聖武天皇が百僧を呼んで、「行茶(ぎょうちゃ)の儀」という儀式を行なったという記録がある。

ところで、「茶経」によると当時のお茶は「餅茶(べいちゃ)」というもので、これは蒸した茶の葉を臼でつき、煎餅のように固めたもの。飲む時は少しずつ砕いて煎じて飲んだ「煎じ茶」で、おそらく聖武天皇もこの「煎じ茶」を飲んだのであろう。

しかし、古代の日本では「茶を人生の用に」役立てる風習は育たなかったらしく、平安時代の始めごろまでは、薬湯として飲まれていたお茶も、遣唐使の廃止とともに衰退し、古代のお茶は歴史の舞台から消えてしまうのである。

**宇治茶の時代** 茶の栽培が復活するのは鎌倉時代になって、禅宗の一派臨済宗を起こした栄西が、中国「宋」から茶種を伝えた時といわれる。栄西は種子と共に宋の時代の茶の飲み方、「抹茶法」を伝え、これが「抹茶」の始まりとなる。

栄西は、京都梅尾高山寺の明恵上人に茶の種子を贈り、明恵上人が「梅尾」に植えたのが、梅尾茶の始まりで、その後、明恵上人が茶の栽培に適した土地を探して「宇治」に茶を移し植えたのが、宇治茶の始まりと伝えられる。

当初、お茶は主に僧侶の飲み物だったが、次第に公家や一般の人に広まって行き、特に禅宗との結びつきから、武士が好んでお茶を飲むようになる。

室町幕府の3代將軍足利義満は熱心な禅宗の信者だったことから茶の湯を好み、宇治に「七名園」を造らせて質の良い茶を生産するよう援助した。

また8代將軍義政は、彼が建てた銀閣寺で茶の湯に熱中し、義政に代表される「書院茶湯」の文化は、やがて戦国大名の精神文化として大きな発展に繋がっていく。

戦国の覇者、織田信長が南都への下向途中に宇治に立ち寄り、茶摘みと製茶の風景を見物したのは天正2年3月27日のことで、以後信長は、茶師の森彦右衛門を御茶頭取として宇治郷の支配を命じ、宇治を堺や大津と同じように重要な土地として認識するようになった。



「茶入一つが、一国一城に匹敵する」といわれるように、信長によって「茶の湯」は王者の嗜むものとされ、それは豊臣秀吉にも引き継がれて、「茶」は権力の象徴としての地位を与えられるのである。

一方、臨済宗の一休宗純に参禅した村田珠光は、「草庵茶湯」と呼ばれる茶の湯を創始。これは粗末な座敷に名物を一つ飾りつけただけの禅の観念に通じるもので、珠光の後、その思想を受けついだ千利休によって「禅院茶礼」の茶の湯として大成され、ここに茶文化の一つの頂点を迎えることになる。

宇治のお茶は、このように禅宗、武士、茶の湯の三つと繋がりながら発展していくが、長い間庶民にとっては縁のない高価なものであった。

しかし、室町時代の終わりには、「一服一銭」の立売茶といって茶を飲ませる茶店が現れ、また大きな湯桶に粉茶を投げ込み、柄杓(えしゃく)で泡立てて飲む「桶茶」も出てきて、庶民にもようやく茶を楽しむ時代がやってくるのである。

**煎茶と玉露** お茶はその飲み方によって、茶の葉を粉にして湯に混ぜ合わせて飲む「抹茶」と、茶の葉を浸したお湯にその成分を溶かして飲む「煎茶」に大別されるが、江戸時代半ばまでは「味、香り、水色」の揃った優れたお茶は抹茶で、煎茶は庶民の飲む安物のお茶とされていた。

これは当時の煎茶は、ある時間煮出さないと味が出ず、味が出るまで煮ると香りが抜けてしまうためだが、8代将軍吉宗の時代に、宇治田原・湯屋谷の永谷宋円が、10数年の苦勞の末、抹茶の製法を煎茶に取り入れて改良し、それまでの物とは比較にならないほど質のよい煎茶を作りだした。

その茶は急須にいれて湯を通すだけで、何ともいえない香ばしさと、苦味の中に甘みを含んだ当時の常識を超えた優れたお茶で、この「宇治の煎茶」はそれまでの中国茶に対して、日本独自の煎茶としてやがて日本国中に広がることになる。

宇治煎茶が生まれてから百年後の1835年、江戸の茶商人、山本屋嘉兵衛(かへ)が宇治で偶然に発見した茶を、江戸に持ち帰って売り出したところ、大変な評判を呼んだ。その茶は形が美しい緑の玉で、味が甘露のように美味しいということから「玉露」と呼ばれた。その後明治になって、宇治の茶業者・辻利兵衛が玉露製法に手を加え、現在のような鮮緑な良質な玉露が作られるようになり、宇治を代表する高級茶が誕生、「煎茶」とともに、宇治は代表的な日本茶の発祥地としての地位を確立した。

**現代の宇治** 高林謙三による製茶機械の発明で、明治29年頃から機械による茶生産が始まり、ここから宇治の茶生産は「手揉み」の重労働から解放されていくことになる。

明治初期、宇治市・京都市周辺には、京都府の約半分の1300ヘクタールの茶園があったが、時代の経過と共に減少の一途をたどり、現在は100ヘクタールを下回る状況にある。しかし宇治市の茶は品質において現在

においても日本一であることは全国の茶品評会等で証明されており、今後も生産者や茶商工業者のたゆまない努力によってその名声は時代を超えて引き継がれる。



**お茶の豆知識** お茶の木は茶摘み歌にあるように、2月4日の立春から88日目（八十八夜）の5月始め頃に若芽を出す。この頃の気温が20度前後が適温で、高すぎても低すぎても、また雨量が多すぎても少なすぎても良い茶にならない。

また新芽が良く出るためには、もちろん日光が重要だが、強すぎると芽が早く固くなり、タンニンが増えて渋味が強くなってしまう。ほどよい気温と雨量と日当たりが重要で、特に宇治茶の代表格である玉露や煎茶は、お茶の甘み、うまみを引き出すために覆いをしたり、また春先、芽を吹いたばかりの若葉を霜から守るために扇風機を回したりと、細心の気遣いが必要なのだ。

日本茶（緑茶）の玉露や煎茶は、葉緑素やビタミンC、緑の色素を失わないように、若葉をそのまま高温で蒸した葉を、揉み機で揉んでお茶にするが、「紅茶」や「ウーロン茶」は、お茶の葉を発酵させた後、揉んで作り出す。だから同じお茶の木から製造工程の違いでお茶の種類が分かれるが、高温多湿を好む紅茶やウーロン茶に対して、緑茶はやっぱり、日本の長閑な気候が程よいのであろう。

**ペットボトルの時代** 1985年に伊藤園が缶入り緑茶「煎茶」を発売して以来、日本人のお茶の飲まれ方が大きく変わってきた。89年に「おーいお茶」（伊藤園）がヒット商品となり、翌90年にはペットボトル入りの緑茶が発売された。

以来アサヒ飲料の「十六茶」、コカコーラの「爽健美茶」、麒麟の「生茶」、サントリーの「伊右衛門」と有名ブランドの参入が相次いで、1990年には5万k lの生産量が2007年には250万k lと、実に50倍に増えた。

特に、ペットボトルで急伸したのは緑茶で、現在では紅茶やウーロン茶を含めたお茶系のボトル飲料の50%を占めるに至っている。

健康志向の時代にマッチしたのと、お茶業界の努力で今までは捨てられていた出来の悪いお茶の葉の有効利用ということらしいが、一方でペットボトルのお茶文化、お茶の淹れ方が分からない女子社員や、「淹れる」と漢字の読み方さえ分からない女子大生を増やしていることも事実である。

**茶摘み歌考** ところで、冊子の裏表紙にある今月の歌は、どういうわけか季節外れの文部省唱歌「茶摘歌」になっているが、この歌はどうも当地の和束に昔から伝わる茶摘み歌が元になっているといわれる。

アー お茶を摘め摘め 摘まねばならぬ  
摘まにや和束の 茶にならぬ 摘まにや和束の 茶にならぬ  
アー お茶を摘むなら 裾から摘みやれ  
しんのずわいは 後で摘む しんのずわいは 後で摘む

(和束の茶摘歌)

なるほど「お茶を摘め摘め 摘まねばならぬ」のフレーズの調子は「茶摘み歌」そのもので、これと似たような歌は宇治田原や奈良の田原にも伝わっている。この和束の茶摘歌がいつごろの歌なのかははっきりしないので、どちらが元歌かわからないが、この素朴な歌詞の調子から和束のほうが元歌だろうか。

それとは別に「宇治の茶摘み歌」で、労働歌として、あるいは新茶献上の祝い歌として17世紀ごろから歌われ、その後長く歌われている歌がある。

御世も治まる 御物(ごぶつ)も詰まる なほも上様すえ繁盛  
猿が茶壺を 背たら負うて背負て 宇治の茶山を今越えた  
燃えるお茶の芽 燃え立つ禪 唄に暮れゆく宇治の里  
宇治は良いとこ 玉露の本場 色も良ければ味もよい  
宇治は茶所 茶は縁所(えんどころ) 娘やりたや婿ほしや

(宇治の茶摘み唄)

これは、この文を書くために参考にした「宇治の歴史」に載っていた歌で宇治市公認の歌?だが、どうだろう、かなり商売用のコマーシャルソングのような気がする。もっと素朴な歌がないかと捜したら、次の歌を見つけた。これでしょう。この明るい歌の調子には、宇治の茶畑の初夏の風が吹いているような気がするでしょう。

お茶が済んだら早よ帰れよと 言うた親より 殿が待つ  
誰もどなたさんもおうたいなされ うとうたとて 器量は下りやせぬ  
お茶師番頭さんに上げたいものは ちぎの分銅で 横面を  
宇治はよいとこ北西晴れて 東山風 そよそよと  
お茶を摘むなら下から摘みやれ 上のずわいは あとで摘む  
宇治は茶どころ茶は縁どころ 娘やりたや 婿ほしや

(長い 以下省略)



(参考資料)

やさしい宇治の歴史 岡本望著  
他 インターネット